

天理市萱生町 ヒ工塚古墳第5次発掘調査 調査成果資料

天理市教育委員会文化財課	
調査期間	令和 2 年 1 月 15 日～令和 2 年 3 月中旬（予定）
調査担当	天理市教育委員会文化財課 主任主査 北口 聡人

1. はじめに

天理市教育委員会では、古代国家の発祥にかかわる国内最古の古墳群ともいわれる大和・柳本古墳群の保護に向けて、各古墳の基礎的なデータを集めるための発掘調査を継続的にこなっています。今年度は、ヒ工塚古墳の前方部(四角形の部分)の西側で発掘調査を、南側で電気や地中レーダーによる物理探査をおこないました。

2. ヒ工塚古墳の概要

ヒ工塚古墳は長さ約130mの前方後円墳で、ノムギ古墳とならんで大和古墳群の最も北にある古墳です。古墳は龍王山から北西方向にのびてくる尾根の上に、前方部を西にむけて築かれています。同じ尾根の上には南東にクラ塚古墳、西にノムギ古墳が築かれました。

3. これまでの調査

- ・昭和52（1977）年度 測量調査(橿原考古学研究所)
長さ約130m、後円部(円形の部分)の直径約60mと推定される。古墳の周囲に周濠(ほり)のような地形があることがわかる。
- ・平成14(2002)年度 古墳北側の道路建設に伴う発掘調査(第1次・橿原考古学研究所)
古墳を作る際に埋められたとみられる溝から、3世紀ごろの「庄内式土器」が多くみつき、古墳が3世紀後半～4世紀初頭に築かれた可能性が浮上。
- ・平成15(2003)年度 県道バイパス建設に伴う発掘調査(橿原考古学研究所)。
ヒ工塚古墳の前方部西側(石垣のすぐ西側)の2か所で、古墳の端の確認を試みたが、周濠や古墳の端はみつからず。
- ・平成25(2013)年度 後円部の南側で範囲確認調査(第2次・天理市教育委員会)
従来の推定推定よりも幅が狭い周濠と、その南側に谷のような地形を確認。葺石(古墳が崩れないよう、古墳の表面に葺かれた石)の基底石(一番下に積む大ぶりの石)も出土。
- ・平成28(2016)年度 後円部の北側で範囲確認調査(第3次・天理市教育委員会)
周濠や葺石、基底石を確認。葺石の厚さ約2m。
- ・平成29(2017)年度 古墳及び周辺の地形を航空レーザー測量(天理市教育委員会)
南東から北西に向け地形が下がることを確認。
発掘調査で見つかった基底石の位置から、後円部の直径を約69mと推定。
- ・平成30(2018)年度 前方部の北側で範囲確認調査(天理市教育委員会)
柳本飛行場関連施設などが出土するが、古墳にかかわるものは見つからず。

4. 今回の調査成果（令和2年2月28日現在）

（調査進行中のため、今後内容を変更することがあります。）

（1）地中レーダ探査（天理大学との共同調査）について

天理大学に依頼し、前方部南側で地中レーダ探査をおこないました。調査データは現在解析中ですが、第2次調査で発見した谷の続きが見つかっています。

（2）発掘調査について

古墳の前方部の西端で、東西約14m・南北約2.6mの範囲を発掘調査しました。

・発掘区の下の方で葺石の基底石を発見し、そこから2m弱の高さまで葺石が残っています。下から2～3段は人の頭よりも大きな石を積み上げ、そこから上は人の拳かそれ以上のやや小さな石を積み上げています。細長い石の小口を古墳の表面に向けて積み上げる「小口積み」の構造もよく観察できます。

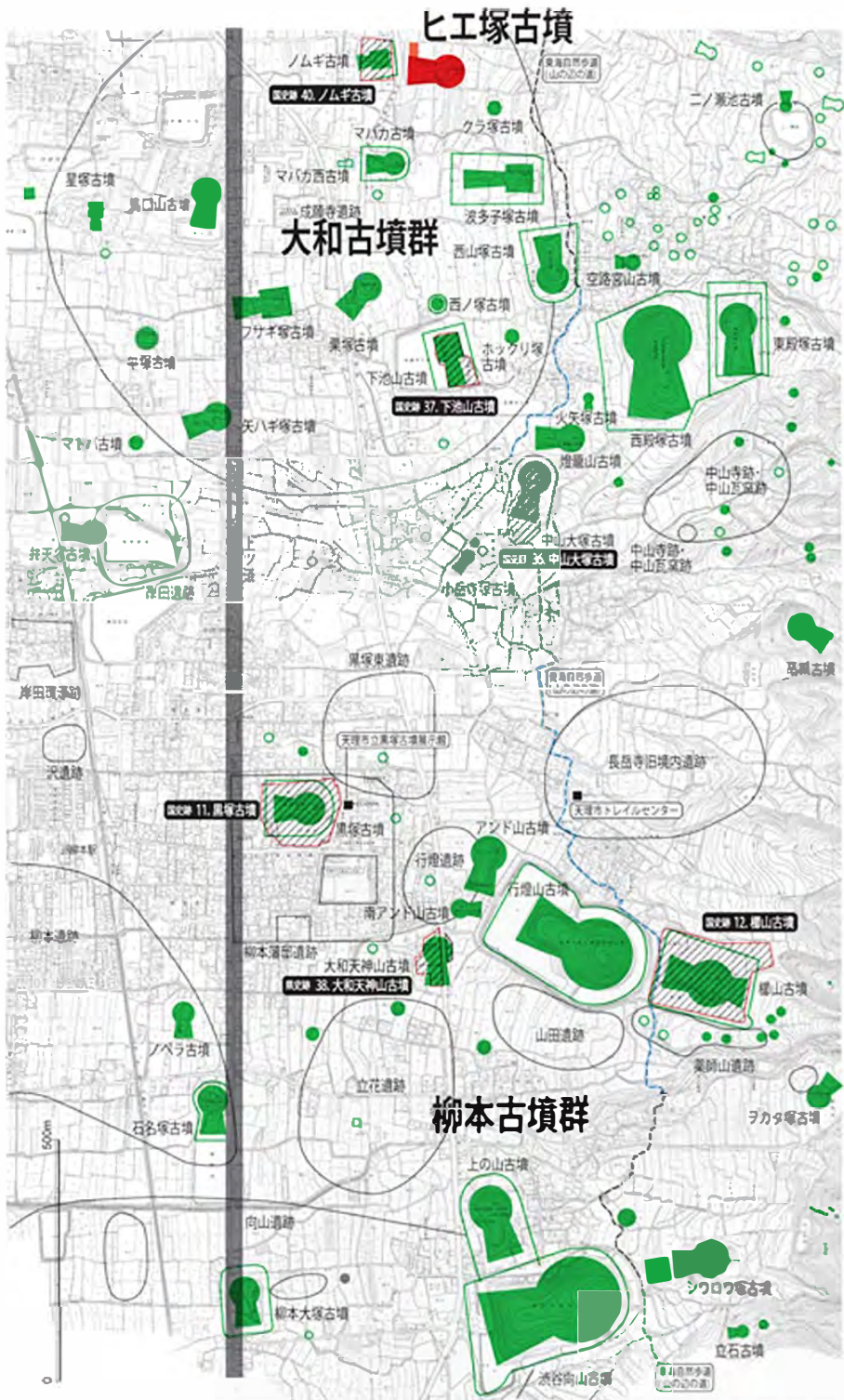
・発掘区の上の方では、古墳は室町時代ごろに大きく破壊され、葺石は残っていません。破壊さ

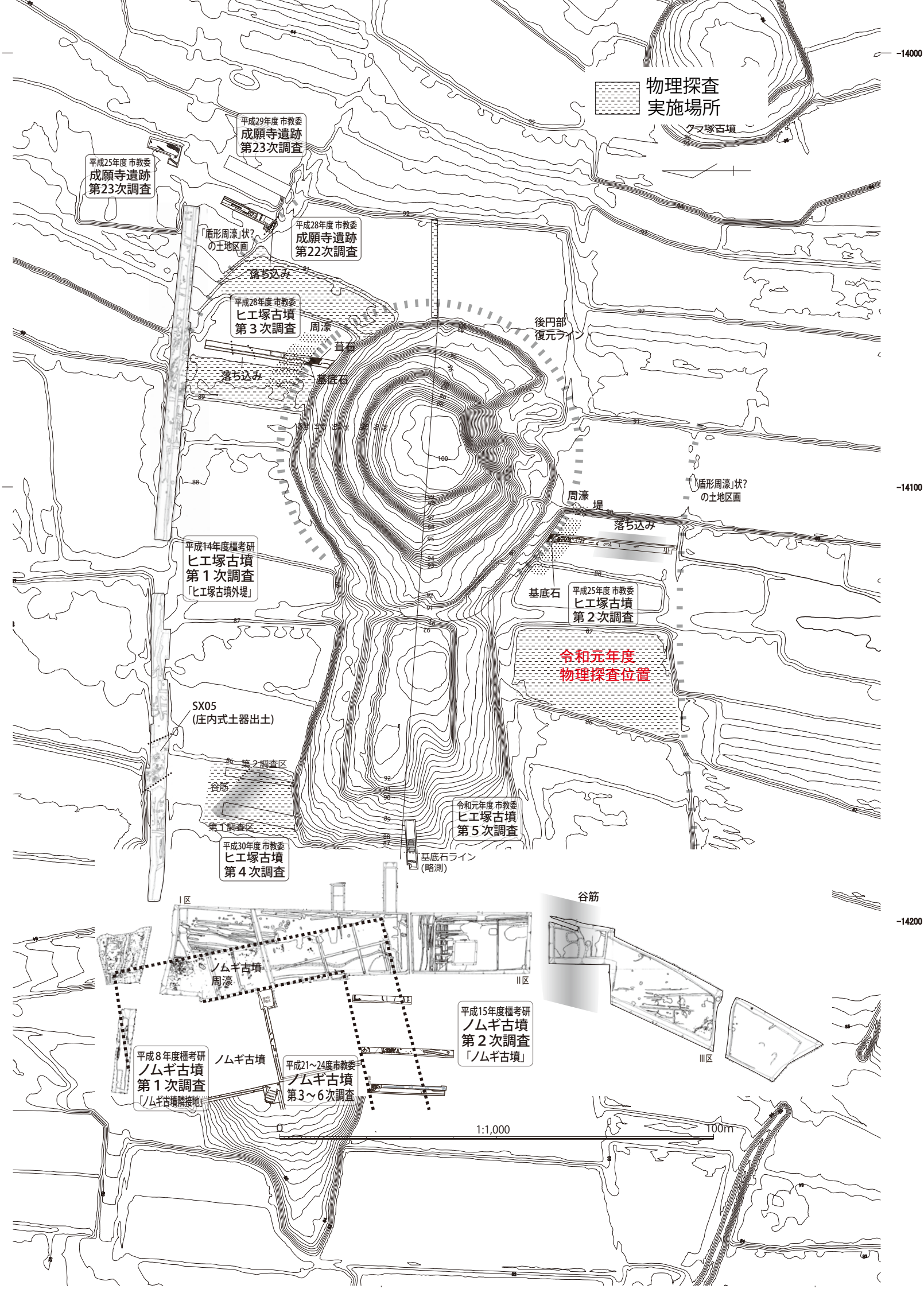
れた断面では、古墳を造る際に赤黒い土と黒い土を交互に積んだ様子が観察できます。

・基底石の西側(古墳の外側)には幅1m程度の何も無い平らな面があり、そこから徐々に西へ地面が下がっていきます。周濠があった可能性もありますが、後の時代にこわされており、確かなことはわかりません。この部分は石垣が造られた際に大きな根石が置かれており、報道発表の時点ではこの根石を、基底石を掘り出して再利用したものと考えていました。

5. おわりに

報道発表時点ではヒ工塚古墳の全長を約129mとしていましたが、新たに見つかった葺石基底部の位置から、全長はさらに1.5mほど短かったと考えられます。しかし、いずれにしても、3世紀後半～4世紀初頭の古墳としては、箸墓古墳や西殿塚古墳などの大王墓に次ぐ大きさであることは変わりありません。





ヒ工塚古墳全景（左が北）



調査区全景（西から）



葺石拡大（西から）